

詩

樹木派

高見順詩集

わが埋葬

死の淵より

重量喪失

補遺

さまざまな角笛

解説

清岡卓行



高見順全集

第十五卷

勁草書房刊



高見順全集 第十五卷

昭和四十七年十月二十日印刷
昭和四十七年十月三十一日發行

著 者 高 見 順

發 行 者 井 村 壽 二

印 刷 者 山 田 博

發 行 所 勁 草 書 房

東京都文京區後樂二―二三―一五
電 話 東 京 八 一 四 (六八六一)
振 替 東 京 一 七 五 二 五 三
◎ 高 見 順 一 九 七 二
〔〇三九五―八三三五〇〇―一八三六〕

* 定價は外函に表示してあります。

高見順全集 第十五卷

編纂委員

川端康成

伊藤整

澁川 曉

平野 謙

中村眞一郎

小田切進

目次

昭和文學盛衰史

7

文學的現代紀行

403

解説
山本健吉
解題

495 485

昭和文學盛衰史

第一章 不斷の齒痛

花袋秋聲生誕五十年祝賀會（大正九年）——接待係
葛西善藏——『岩井』の愚痴——「文壇華やかなり
し頃」——大正作家——『現代小説選集』藤村序文
——日本社會主義同盟創立大會——『種蒔く人』創
刊——菊池寛の社會主義觀——『文藝春秋』創刊
（大正十二年）——有島武郎の死——『文藝戰線』『文
藝時代』の創刊（大正十三年）——罵倒批評家堀木
克三・藤森淳三——新感覺派——『不斷の齒痛』——
昭和文學の出發

——その日は朝から雨であつた。

鎌倉圓覺寺前の假寓を出るときから降つてゐた。彼は汽車で東京へ出た。新橋驛でおりて有樂座へ行つた。有樂座で、講演會があつた。

樂屋へ行くと、友人から、やあ、ご苦労さんと言はれた。その友人は、その日、講演をすることになつてゐる。彼は、しかし、別に講演を頼まれてはゐないのだから、樂屋にゐて

は恰好がつかない。そこで廊下に出たが、廊下をうろついてゐるのも變なので、客席に入つた。入つたが、講演を聞く氣にもなれない。また、廊下に出た。身のおきどころが無い感じだ。おりおりしてきた。

やつぱり樂屋へ行つた。樂屋には、講演者でない者たちも、悠々と坐り込んで、「朝日」をふかしてゐる。そこへ、講演係の徽章をつけた男が、記念寫眞をとるから舞臺に集つてくれと言つて來た。彼も聲をかけられたが、つまらん連中が得得と舞臺に出て行くのを見ると、その俗物根性にむかついてきて、記念寫眞の仲間に入らなかつた。しかし、すぐ彼はそんな自分が寂しく悲しく思はれた。

講演會がすんだ。秋聲先生に挨拶をしようと思つて樂屋へ行くと、姿が見えない。久米正雄がそこにゐたので、聞いてみると、

「徳田さんどうしましたつて？ さあ、もう、精養軒の方へ、みんなと行つたんぢやないかしら」

彼はひとりて有樂座を出た。そして築地行の電車に乗つた。日が短い十一月なので、外は暮色がすでに濃い。電車を降りて、雨の中を歩いて行くと、築地精養軒には煌々と電氣がついてゐる。二人曳きの人力車がその前にとまつた。眼にしみるやうな白足袋が、幌の間からまづ現はれ、紋附袴の紳士が玄關に降り立つた。堂々あたりを拂ふその人物は、新聞の

寫眞でよく見る顔だつた。竹越三又か江木翼か。

彼は自分の足もとに眼をおとした。黒足袋に、はねがあがつてゐる。何葉と彼は思ふ。しかし、紋附は、やつぱり着てきた方がよかつたのではないか。

「いや、白鳥は着てゐなかつた」

有樂座で會つた正宗白鳥は、荒い大島の緋かすりで、それで舞臺にも出て講演をした。

「でも、白鳥は白足袋を穿はいてをつた」

紋附は着てなくても、白足袋は穿はいてゐた。

「ああいふところ、あすこに、白鳥の用意が窺はれる」

彼はそんなことをつぶやいて、氣を紛らせた。彼は紋附を持つてない。紋附を着るとなると、借りてこなくてはならない。借りに歩くことも面倒だが、他ならぬ秋聲先生のお祝ひの會なのだから、ほかの人の會に出るみたいな紋附を着たりしない方がいいだらうと思つたのだ。偉さうに紋附を着て行くことはない。紋附を着る柄でもないだらうと、そんな風にも思つたのだ。へそ曲りではなく、彼としては謙讓の氣持である。

徳田秋聲を彼は師と仰いでゐた。(その秋聲の紋附を借りて、ほかの會に出たことがある。)秋聲はその年、五十、田山花袋も同じく五十歳を迎へてゐた。大正九年。花袋、秋聲は押しも押されもせぬ文壇の大家であつた。その生涯五十年

祝賀會が全文壇をあげて企てられた。

「此の企畫ほど文壇各界の賛同と協力を得た會は、古往今來他に無かつた」と久米正雄は『文士會合史』『新潮』昭和二十六年四月)のなかで言つてゐる。準備會が新橋驛樓上のミカドで行はれた。記念講演會及び祝賀會開催のこと、記念小説集の出版、その印税を兩氏に贈ること等が、準備會で定められた。

彼——葛西善藏は準備會で、接待係の役をふり當てられた。師と仰ぐ秋聲の會のことだし、準備會から正式に言はれたことでもあるからして、彼は、斷ることをしないで、接待係の役をひき受けてゐた。名譽——と言ふのも變だが、會が會だから、まあ、そんなものを感じてもゐた。しかし、接待係、何々係といふのが集つての相談會には、最後の相談會に一度出たきりだつた。出なきや悪いと思つても、鎌倉から汽車賃を拂つて——それだけならいいが、會費のいる會だと思ふと……それで、最後の會にだけ出て、接待係を正式に引き上げた。

引き上げた以上は役目を果さうと、彼は氣のつまる精養軒に入つて行つたが、さて、誰も彼に接待係の徽章をくれない。きちんと紋附を着た白石實三が、これも接待係の口だつたが、胸に徽章をつけて歩いてゐる。

「君、その……」

と彼が實三の徽章を指さすと、

「葛西さんは——無い？ それ」

と實三は同情を示したが、同情だけではなんにもならぬ。

彼のほしいのは、同情より徽章である。徽章が無くては、彼の性質として接待係はできない。名譽の徽章でなくていいから、接待係といふことを明示してくれるだけのものでもいいから、その徽章がほしい。彼は困惑した。徽章があつたつて、ほかの人のやうな接待係のできる彼ではないが、つまりそんな彼だから、かうなると動きがとれなくなつた。

「ひとに、接待係をやつてくれと言つて……」

彼はやり切れない氣持になつた。

「徽章をくれないのは、紋附を着てこなかつたからか」

そんなことは、分つてさうなものだ。これでは困るんだつたら、初めから俺に接待係をやれなぞと言はなきやいいのだ。彼はここでも、身の置きどころが無い苦しさを、いや、今度はおつとひどいそれを感じた。徽章が貰へない以上、接待係の部屋に入れない。やむなく來賓室にゐたんぢや、きまりが悪くてしやうがない。さりとて、主賓室に入つてゐる譯にもいらない。

「——宴會が始まるまで、永い間といふものは、僕の一代のなかでの閉口の時間だつたな。役割は始めから定つてゐたん

ですから、皆さんが、何故、僕にもさういふ役目を與へて呉れたならば、僕にも徽章を呉れなかつたか」云々と、葛西善藏はそのときのことを、さう書いて、いや、言つてゐる。

「誰がそんな意地悪をしたといふことは思はないけれど、自分の皆至らないためと思ふから……」なぞと言ひながらも、綿々縷々と愚痴つてゐる。「岩井」といふ題のその口述筆記に據つて、私は書いたのだが、いつそ、善藏の口述筆記をそのまま丸寫しにした方がよかつたかもしれない。善藏のそのときの氣持は、善藏自身の口から聞くのが一番いいのである。しかしながらまた、ひとり合點の多い彼の口述そのものの引用では、かへつて善藏の氣持が讀者に通じかねるのではないか。さう考へて、あへて自ら接待役を——説明役を買つて出たのだが。

彼はそのときのことを、「接待係」といふ題で小品に書かうと水い間心掛けてゐたと『岩井』で言つてゐる。つまり、それほど、彼の心に、こたへた出來事だつたのだ。そのこたへ方が果して私の敘述で傳へられたかどうか。左様、そのこたへ方は善藏の原文をもつてしても、今日の讀者に的確に傳はるかどうか。すこぶる疑問とせねばならぬ。的確を期するために、大正時代の文壇心理や大正作家の精神的風景を同時に展開することが必要となつてくる。

それは私の任ではない。私のこれから書かうとすることは、

昭和文學の回顧である。私はただ、一言、かう言ふのにとどめねばならぬ。ここに――大正作家の典型人のひとりであつた葛西善藏のこの「閉口」に、いはゆる「文壇華やかなりし頃」の春風駘蕩たりし大正期の文士氣質の一典型を見る。

私は、しかし、そのことだけのために、花袋秋聲祝賀會を持ち出したのではない。大正九年十一月のその會は、華やかなりし大正文壇のなかでも特に華やかな文壇行事だつたのだ。さうしてそれは、明治期とくらべていかにも短い、左様、あたかも十一月の日のやうに暮れるのが早かつた大正時代の、その黄昏に面した大正文學の最後の夕映えを象徵するものとして見ていいのではないか。

記念小説集が新潮社から出版された。三十三人の作家が短篇を寄せた。あとがきに「……兩氏が小説家たるの因縁により、戯曲、詩歌、評論の類は姑く措き、現文壇に活動せられつつある小説作家の創作のみに限ることとせり」とあるごとく、劇作家、詩歌作家、評論家の名は見えないが、大正時代の小説家はことごとくここに名をつらねてゐる。大正作家とはいかなる人々か、それを知らうとするには、まことに便利であるからして、ここに煩をいとはず列舉しておかう。

島崎藤村、谷崎潤一郎、里見弴、中村星湖、芥川龍之介、藤森成吉、正宗白鳥、有島生馬、上司小劍、相馬泰三、水上瀧太郎、谷崎精二、菊池寛、加能作次郎、廣津和郎、吉田絃

二郎、豐島與志雄、久保田万太郎、小川未明、江口渙、宇野浩二、久米正雄、水守龜之助、葛西善藏、室生犀星、中戸川吉一、加藤武雄、近松秋江、細田民樹、田中純、白石實三、佐藤春夫、有島武郎。

ここで、ひとり、長田幹彦が落ちてゐる。人選に洩れたのである。その間の事情は、先にあげた久米正雄『文士會合史』に詳しい。その人選のときの模様ヒントを得て、菊池寛は歴史小説『入れ札』を書いた。菊池寛と言へば、横光利一、川端康成等の名がすぐ脳裡に浮ぶが、この人々の名は出てゐない。まだ文壇に登場してゐない。里見弴の弟子として、大正八年『イボタの蟲』で文壇にデビューした中戸川吉二（恐らく三十三人のうちの最年少者だらう。）を最後として、大正文學の實質的擔當者が全部出揃つてゐるこの顔觸れは、今日から見ると、すこぶる興味深いものがある。

『現代小説選集』といふのが題名であつて、八一九頁に及んでゐる。花袋、秋聲より一つ年上の島崎藤村が短い序文を書いてゐる。いかにも藤村らしい言ひ廻しのもので、「花袋君、秋聲君、君等が五十年の誕辰を記念するために、三十餘人のものが各自一篇づつの創作をここに持ち寄つた」で始まり、「――君等と共に歩いて來た長い年月の間のことを思へば、私は黙して居たいやうな氣がする。それを自分の感慨にかへたいやうな氣がする。夢は長く、行く路は難い。君等の誕生

を記念することは、やがて時代の難さを記念することである」と結んでゐる。

行く路は難い。文學行路の難さを藤村はしばしば口にしてゐる。このときの言葉も、そのひとつにすぎないが、またそれとやや違ふ、何か暗示的なものを私は感じる。

大正文壇のいはば最後を飾る花袋秋聲祝賀會のあつた大正九年に、偶然ではあらうが、日本社會主義同盟の結成が行はれてゐる。祝賀會とは一月違ひの十二月に、神田基督教青年會館で創立大會が行はれた。當日の出席者は三百。花袋秋聲祝賀會の出席者と、同數である。祝賀會と違ふのは警官五百の物々しい警戒裡に會が行はれた。この我が國における社會主義運動史上、永久に消しがたい足跡をのこしてゐる日本社會主義同盟は、その年の夏以來、労働者團體、思想團體、學生團體等に所屬してゐる人々及び社會主義的思想家、作家を網羅した發起人によつて計畫されたもので、創立大會當日の出席者は三百であつたが、同盟加入の申込者は三千を數へた。文學者で同盟にいち早く參加した人は、江口渙、秋田雨雀、藤森成吉等、同盟創立の翌年には、小牧近江、佐々木孝丸、村松正俊、尾崎士郎、前田河廣一郎、平林初之輔等がこれに參加した。前記の『現代小説選集』に、江口渙は——日本社會主義同盟員の彼は『遼河の夜』といふ短篇を、そして同じく同盟員の藤森成吉は『山』といふ短篇を寄せてゐる。

私は何を言はうとしてゐるのか。文學行路の難さに、大正期の知らなかつた難さが、新たに加はらうとしてゐる。祝賀會と、はしなくも時を同じうした社會主義同盟の發足といふ事實は、そのことを私に告げるのである。新たな難さとは何か。思想だ。大正期にあつては、文學と全く無縁のものとなされてゐた社會思想。それが新たに文學行路に不気味な姿を現はさうとしてゐる。そのことを藤村は豫感して、行く路は難いと言ひ、時代の難さと言つたのであらうか。恐らくは、さほど意識して言つたのではないにちがひないが——行く路は難い。

翌十年には、早くも第四階級文學論がおこり『種蒔く人』が創刊された。ブルジョア文學とプロレタリア文學との激烈な對立の第一歩がここに始まつた。すなはち、大正文學が昭和文學へと推移する兆候のひとつがここにある。

のちにはゆるブルジョア文壇の大御所と稱せられた菊池寛に、次のやうな言葉がある。當時、菊池寛もこのやうなことを言つたのである。「資本主義を基本とする現在の社會組織が、ホンの一部分のために、多數の人間を如何に不正に不當に虐げてゐるかと言ふこと、又それに對抗して起つた社會主義の理論が大體に於て眞理であることは、少しでも思想的良心のある者の否定し得ない所であると思ふ。世の中が社會主義化することは、ただ時の問題である。時と手段の問題が

残つてゐる丈である。」（隨筆集『文藝春秋』の「社會主義に就て」より。大正十一年一月、金星堂發行。）——菊池寛にしてこの言葉があると面白半分の披露ではない。これは、文壇といふ象牙の塔の中で大正作家がただ小説修業に専念してゐた頃には、かつて示されなかつた社會的關心である。大正期も終りに近づくに従つて、大正作家もかかる發言をするに至つたのである。

その菊池寛が、當時の俊英の新進作家群を擁して雑誌『文藝春秋』を出したのは大正十二年一月である。その年の九月に、關東大震災があつて、藝術なんか駄目だ、髪床屋にでもいつそなつた方がいいと菊池寛をすっかり悲觀させたことは有名な話だが、震災の直前に有島武郎の心中事件があつて、これも文壇にショックを與へた。葛西善藏の『岩菲』には、有島武郎が例の祝賀會でテーブル・スピーチをしたことが述べられてゐて、「藝術のことは帝王以上のものであり、又乞食以下のものである」と「稍々激越な調子」だつたと言ふ。颯爽たる印象を、文壇の内外に與へてゐたその有島が、輕井澤で心中をした。痴情の果てと見る人と思ひの惱みと見る人とあつた。恐らくは原因は兩方にあつたのだらうが、あの藤村の言葉の暗示する文學行路の難さ、新たに文學行路の前に立ちはだかつてきた時代の難さ、それを有島の死は私たちに知らせるのである。

大正十三年六月、『文藝戦線』が創刊された。思想と無縁であつた文學界に、思想に據る文學が登場した。同年十月『文藝時代』が創刊された。

かうして、昭和文學の回顧に入るのである。時代はまだ大正だが、『文藝戦線』『文藝時代』の創刊は昭和文學史に屬するものと考へられる。私はその大正十三年の春、高等學校に入つた。私たち文學青年、いや、いくら舊制の高等學校でもその一年生は文學少年と言ふべきか、ともあれ、私たちは、あの『文藝時代』の創刊號をどんなに眼を輝かして手にしたことか。本屋は大學前の郁文堂だつたと思ふ。四十錢であつた。私は『文藝時代』を買つて本屋を出るとすぐ開いて、歩きながら讀んだ。ここに、私たち若い世代のかねて求めてゐた、渴えてゐた文學が、初めて現はれた。そんな氣持で『文藝時代』の創刊號を迎へた。かうした感激を、私と同年輩の文學愛好者はひとしくその頃、味はつたものではなからうか。創刊號の創作欄には五篇の小説が並んでゐた。横光利一『頭ならびに腹』、菅忠雄『銅鑼』、伊藤貴麿『海底地震』、石濱金作『ある戀の話』、佐佐木茂索『曠日』。評論は十一谷義三郎『作家の世界』と今東光『現象論としての文學』。編輯後記の下に十四人の同人の名がつけられてゐる。伊藤貴麿、石濱金作、川端康成、加宮貴一、片岡鐵兵、横光利一、中河與一、

今東光、佐佐木茂索、佐々木味津三、十一谷義三郎、菅忠雄、諏訪三郎、鈴木彦次郎。

話が飛ぶが、あれは昭和二十何年のことだつたか。大正末期からいきなり二十年以上も話が飛んでは、眩暈をおこさうだが、椎名麟三が力作を次々に發表して評判の頃、私はある雑誌の座談會で、彼や梅崎春生と同席した。そのせつ、椎名麟三が私に言つた。文壇から、かう、やつつけられては、かなはない。高見さんの書きはじめの頃も、やつぱり、こんなこと、あつたんでせうか。終戦後の特別の現象ぢやないでせうか。私は、特別といふことはないでせうと答へながら、意外なおもひがした。椎名麟三ほど好評に包まれてゐる作家も珍しいと私はその頃、思つてゐたからだ。そして私は、「あの川端さんだつて、横光さんだつて、その出だしの『文藝時代』の時は、舊文壇から随分やつつけられたものです」

と言つた。その頃の方が、そのやつつけ方は、もつと痛烈で暴力的であつたと私には思はれる。批評といふより罵倒だつた。私のいはゆる出だし頃（昭和十年）も、罵倒の方だつたが、新感覺派の擡頭時分の罵倒と比べると、半分罵倒で半分批評といふふうに変つてゐた。それが、現在は罵倒といふより批評になつてゐる。しかしそれだけやられる方は骨身にこたへる。さう言へるかもしれないが、

「若い世代の讀者は、きつと君たちを斷乎として支持してゐるんだ。やつつけられたつて、平氣だ。『文藝時代』も既成作家や舊文壇御用の月評家たちから、クソミソにやつつけられてゐたものだ。しかし、僕たち、その當時の若い世代の讀者は、『文藝時代』を斷乎として支持してゐた。……」

私はかう椎名麟三に言つた。いま、この回顧記を綴つてゐて、ふとそれを思ひ出したので書きとめたのだが、話を元に戻して——『文藝時代』創刊號の六號欄（文壇波動調）に、こんな言葉が載つてゐる。

堀木克三といふと文壇では輕蔑することになつてゐるんだが僕なんか堀木を相當認めてゐる。堀木の批評はラフだから、自惚の化物みたいな作家は、文藝が分らんとか何んとか、えらさうな事を言ふが、堀木の見識には見るべきものがある。少くとも自惚の化物よりかは目が明いてゐる。堀木克三よしつかりせい。肩はいくらでも持つてやるぞ。（天の馬）

この堀木克三が藤森淳三などとともに『新潮』を根城にして新感覺派退治に力をつくしてゐた。新感覺派支持の私は彼等に、彼等の言説といふより彼等自身に、ほとんど憎惡に近いものを感じた。それ故、『文藝時代』の六號雜記は、大きく出たと溜飲のさがるおもひだつた。愛すべきファンの心理だ。ファンの私は事ほど左様に新感覺派を支持してゐた。だ

が、そのことは、當時の新感覺派作品が、當時の文壇の作品の中で特に勝れてゐたといふ意味ではない。舊臘、ある必要から横光利一の當時の作品を読んでみて、がっかりした。こんなものに感激してゐたのかと驚いた。堀木克三等の當時の罵倒（「新時代の蛙等よ」と罵つた生田長江の論文も、これに含める。）を今讀み返してみたら、罵倒の方が正しいと思はせられるかもしれぬ。さうとしても、私は當時の私の新感覺派支持を、若氣の愚かさといふふうには思はない。罵倒支持に較替へすることはできない。それは意地ではない。私たち、當時の若い世代は、新文學を翹望してゐたのである。現はれた新文學が今からすると、たとへどんなに安手なものであらうと、それを支持したといふことは、とりもなほさず、さうして新文學の興つてきたことに喜びを感じたのである。

私は中學生の頃は白樺派の愛讀者だつた。人と作品を尊敬してゐた。それが新感覺派に移つたといふのではなく、高等學校に入つてもその尊敬に變りはなかつたが、そこには常に一種の距離のあつたことも變らない。新感覺派と私の距離を兄と弟のやうな距離とすれば、親と子のやうな距離である。白樺派は白樺派として、新感覺派に近づけたゆゑである。

白樺派へは私は求道的な氣持で近づいて行つたのだつた。私のうちのその求道的な氣持が、高等學校へ入ると、私を社會思想に近づかせた。學内の社會主義の研究會に、私は熱心に

出席してゐた。そんな私が社會主義作家の結集である『文藝戰線』よりも、『文藝時代』の方にその頃、情熱的な支持を傾けたのは妙である。新感覺派を新文學とするならば、文藝戰線派も新文學である。しかるに、私は新感覺派の方を文學的に支持した。そしてこれは私だけのことではない。これは、どういふことだらうか。

プロレタリア文學理論がまだ確立してゐなかつた。従つて當時は階級運動をやるのだつたら、中途半端な文藝運動などやることはないといふ考へ方が一般的であつた。階級的な文藝運動は、輕蔑視されがちであつた。その尻馬に私が乗つたせいもあるが、『文藝戰線』の文學作品がいほゆる新文學らしい魅力がなかつたことも、私をして新感覺派支持に傾けさせた。文學としたらやはり新感覺派の方がいいといふ譯である。なほ新感覺派文學は既成文壇に挑戦して興つた新文學であるといふことが、一種の反逆的な印象を與へてゐた點も見のがせない。藝術上の反逆であることはたしかだつたが、その反逆性が『文藝戰線』の社會的反逆性と一脈相通するやうな錯覺を生んでゐた。『文藝戰線』派の伊藤永之介（當時は評論家であつた）や赤木健介等が『文藝時代』に評論を書いてゐたのも、その錯覺のせゐに違ひない。

事實は、しかし、『文藝時代』の基調をなすものは「インテリのマルクシズムに對する意識的な抵抗」であつた。これ